一、次の文章を読み、後の問いに答えよ。

日本人は木とともに文化を作りあげてきた。日本列島の山々は木々に①オオわれ、緑にあふれた風景が広がっているが、これらの森林のめぐみを②享受することで、木の文化ははぐまれて[注1]きたといっても過言ではない。世界最古の木造建築である法隆寺金堂（こんどう）をはじめ、前近代の建物のほとんどが木で造られてきたことはその証しのひとつといえる。また、木とともに歩んだ長い歴史のなかで、身近な生活道具から美術工芸品に至るまで、木を扱う深い知識と高い技術を③チクセキしてきており、世界に④ホコるべき日本の文化である。【ア】

いっぽうで現代の日本、とくに都市部では鉄やコンクリートのビルやマンションが林立し、人びとは屋外を見るにもガラスの窓越し、室内を見わたしてもプラスチック製品に囲まれ、化学繊維の衣服を身にまとっている。日常生活と森や木との距離が離れているため、森林のめぐみを実感しにくいかもしれない。とはいえ、春にはサクラ、秋にはモミジと、木々の告げる季節の移ろいは私たちの感性に息づいている。言葉をみても、［1］状態を「A木に竹を接ぐ」と表現したり、ハレの舞台を「檜舞台」といったりする。【イ】

日本では木々に限らず、そこに生きる動植物、落葉、山菜に至るまで、森林のめぐみを享受してきた。さらに保水・防風・気象⑤緩和機能など、森林は人間に適した⑥カン境を構築する一翼を担っており、目にみえない恩恵は計り知れない。陰に日向に、森や木は生活に密着した存在であり続けているのである。

もちろん洋の東西を問わず、人類が森林のめぐみを享受してきたことは間違いない。「木の文化」の東洋に対して、「石の文化」の西洋と対比的に語られることも少なくないが、実は西洋においても木材は各所で用いられている（ヨアヒム・ラートカウ『木材と文明』）。奇しくも二〇一九年四月の

火災によって、パリのノートルダム大聖堂の屋根が木造であったことが広く知られるようになったが、軽くて丈夫で、さらに加工しやすい木材は建材として重宝されたのである。これは特殊な事例ではなく、北欧、東欧、スペイン・フランス境のバスク地方など、ヨーロッパ各地に伝統的な木造軸組構法の建築物が現代にも数多く受け継がれている。なかにはバスク地方の一部の木造教会のように、木を用いながらも石造のようにみせた建築も点在している。そこでは石の目まで精巧に描いて柱を大理石にみせたり、石の継ぎ目を表現して石造の尖塔アーチのようにみせたりしており、その技法や熱意は驚愕に値する。木目の美しさや温もりなどを活かす日本では思いもよらない独特の嗜好性を示しており、興味深い。【ウ】

また建築に限らず、酒樽や家具などの生活用具をはじめ、大航海時代に大海原を駆けた帆船も木造であったし、西洋絵画にも祭壇画や宗教画の板絵はもちろん、布地のキャンバス画にも木製の額縁が用いられている。この額縁づくりにも工夫が⑦凝らされ、⑧荘厳なバロック調のルイ一四世様式、そして⑨カイガラや宝石をモチーフとしたロココ調のルイ一五世様式、革命後の直線的なアンピール様式など、額縁も多彩な文化を紡ぎあげ、絵画とともに継承されている。楽器をみても、一七～一八世紀に作られたストラディバリウスのバイオリンは改造や補修を⑩経ながら大切に継承されており、その音色は今も世界中の人びとを魅了している。このように西洋においても木は身近な材料で、豊かな文化を築きあげ、継承してきたのである。【エ】

さて西洋の木の文化に話がそれたが、これと比べても、東洋、とりわけ日本の木とともに歩んできた歴史は重厚である。

日本建築を例にとると、柱・梁などの構造材は当然として、扉や板壁などの柱間装置、そして檜皮葺（ひわだぶき）や板葺のように屋根の葺材にまで、植物性の材料が使われる。とくに住宅では建具でも紙を張った明障子（あかりしょうじ）を用いることが多く、日本の伝統建築は木と紙でできていると揶揄されることさえあ

る。さらに茶室や数寄屋（すきや）では、木の樹種や木目はもちろん、節の位置にまでこだわって材の選択に心を配っている。船・家具などの大型の木製品、農耕具・桶・箸などの道具にも木材の使用はみられるが、まさに日本の伝統建築は木の文化の象徴的存在といえよう。

（海野聡『森と木と建築の日本史』〈岩波書店・二〇二二年〉に基づく）

〈注記〉引用元に記されていた「（図0-1）」および「（第四章参照）」という表現は、出題上の観点から削った。

注1　「はぐまれて」……原文のまま表記した。問題を解くにあたっては「はぐくまれて」の意で解すること。

問一　傍線部①③④⑥⑨について、カタカナを漢字にあらためよ。

問二　傍線部②⑤⑦⑧⑩について、その読みをひらがなで書け。

問三　次に掲げる【脱文】は本文から抜き取ったものである。この【脱文】を挿入するのにもっとも適切な場所を本文中の【ア】～【エ】の中から一つ選び、記号で答えよ。

【脱文】　このように木々は今なお生活のなかに溶け込んでおり、単なる物質的な存在意義を超越して、日本の文化に深く根付いているのである。

問四　空欄 1 に当てはまる表現としてもっとも適切なものを次の①～⑤の中から一つ選び、番号で答えよ。

① 革新的な　② ひとりよがりな　③ 滑稽な　④ ちぐはぐな　⑤ 不誠実な

問五　波線部A「木に竹を接ぐ」に関連し、次の（一）（二）の慣用表現に関する問いに答えよ。

（一）「木に竹を接ぐ」の傍線部の読みをひらがなで書け。

（二）次に示す①と②は「竹」あるいは「木」の字を用いた慣用表現とその意味である。①と②の空欄部分に入る漢字一文字をそれぞれ答えよ。

①□竹の勢い　（意味）止めようがないほどの激しい勢いのたとえ。

②□の木阿弥　（意味）一度良くなったものが、再び以前の状態に戻ること。

問六　次に示す①～④の各文について、本文の内容と合致するものには○を、合致しないものには×を記せ。

① 日本では、木材を単に建築物を構築するために用いる実用的な材料としてのみ捉えてきたわけではない。

② 「木の文化」を有する東洋に比して、西洋では石造りの文化を持つとしばしば称されてきたが、生活用具や工芸品などには木材が用いられていることからも分かるとおり、西洋にも木の文化は存在する。さらに近年では、西洋においても木材を用いた建築物の方が主流であったことが明らかになっている。

③ 西洋の「木の文化」と日本の「木の文化」はそれぞれに独自性を持ち、発展してきたが、木とともに歩んできた歴史の長い日本の方が高い価値を持つ。

④ 日本の前近代の建築物の大半は木造であり、木と紙でできていると称賛されるほど、建築物の各所には植物性の材料が用いられてきた。

二、次の文章を読み、後の問いに答えよ。

奏者は孤独を生きる

一丸となって共に演奏しているかに見えるAオーケストラプレイヤーたちは、実際にはひとり一人が孤独だ。おかれたポジションの責任を果たすことができるのは自分のほかにはいないからだ。「みんなで①渡れば怖くない」とばかりに、[1]を放棄し互いにB寄りかかろうとする奏者に、オーケストラの席は用意されていない。

意外に思われるかもしれないが、これは tutti（トゥッティ）を弾く弦楽器奏者たちも変わらない。1st ヴァイオリンなら1st ヴァイオリン、ヴィオラならヴィオラ……と②皆が同じ楽譜を弾くのが tutti ではある。ときに一〇名を超える奏者がいっせいに同じ音をだすのだから、責任が分散されてもよさそうなものだ。でもそうはならない。一列目には一列目の、二列目には二列目の、三列目には三列目の役割がある。しかも、列の外側に座るのか、内側に座るのかによっても果たすべき責任が違う。

もちろんすべてのメンバーは、指揮者に統③ソツされて曲の完成を目指す。コンサートマスターを核に結束もしよう。その意味では、根っこのところで、一つにはつながっている。でも、それぞれの奏者は幹から伸びた④枝であり、葉っぱだ。一つとして同じ色の葉っぱもなければ、同じ形の枝もないことは自然の樹木を観察するまでもない。そこでは各々が別々の役割を果たすことを期待され

ている。だからどれほどメンバーの数が増えても、奏者は仲間を頼ることのできない緊張感にさらされている。

上司もいなければ部下もいない。きわめてフラットな楽器同士の関係でオーケストラは成り立つ。一見上司のようにふるまう指揮者も、本番ではなにも手をくだすことはできない。もし彼らが「タクトを振りおろして、誰も音を出してくれなかったら……と思えば、それは恐怖でしょうね」と語るのは『証言・フルトヴェングラーかカラヤンか』の著者川ロマーン恵美氏。同書には実際「ソロの誰かに何かが起こっても、私はどうすることもできない」と恐怖と闘うカラヤンのことばが紹介されている。つまりどのような音を出すかは、各奏者に委ねられるということだ。いったんその席に座ったものは断固として、その人間の責任で音楽を作らねばならない。それがオーケストラの掟だ。皆で一つの音楽を奏でながらも、奏者は孤独を生きる。

だが同時に、孤独を引き受けながらもなお、その音楽家たちが調和を希求する、というパラドクスにおいてオーケストラの持つ本質は⑤ウかび上がる。それこそがまさにオーケストラの存在価値を裏づけるものだ。ひとびとが夢見、未だ叶うことのない社会のあるべき姿がそこに立ち現れるからだ。ヨーロッパ近代という限られた地域と限られた時代に誕生したオーケストラが、地球規模で広まり、世界の各地に定着した秘密もまたそこにある。

豊饒な響きは音の「一致しなさ」から?

オーケストラのあの豊饒な響きは、孤独な魂が、なお他者とひとつになることを試みる、という葛藤のなかからしか生まれ得ないものだ。

どんなに耳を⑥スましても聞こえようもない小さな音にまで、オーケストラの奏者がこだわりを見せるのも、その調和を願えばこそ、だ。わずかな音の差が全体のパフォーマンスに影響すること

を知っている者の責任感がそうさせる。だから現場で音を発するときの奏者は、全員が皆「自分の奏でる音は正しい音である」ことを信じている。その確信がなければ、怖くてオケ[注1]のなかで音を出すことなど不可能だ。しかもそれは、まわりとの調和をはかることを要求される音でもある。自分とは違う他者の音に寄り添うことを前提に、自分の信じる正しい音を作るという芸当が至難の業であることは容易に想像がつこう。でも、それをしないことにはオーケストラメンバーとしての使命を果たすことはできない。

ただ、もう一方の真実は、オケで正しい音を奏することは結果的には誰にもできていない、という事実でもある。それぞれの奏者の奏でる音はそれぞれに微妙にずれているからだ。ひとり一人の奏者は音楽家として美意識が異なり、価値観が異なるのだから当然ともいえる。音楽家としての訓練を受けてきたからには、そこには必ず奏者の解釈が加わる。こころひとつに音楽を奏でることを目指しているにもかかわらず、不一致の溝を⑦埋めるにはあまりに芸術家としての自我が確立しているのだ。いかにまわりと合わせようとしても、埋めようのないずれが生じてしまうのもいたしかたなかろう。

アンサンブルに集中し、相互に音を聞き合うほどに、それは露わになる。発音のタイミングや音の立ち上がり、立ち下がり、音のつながりや切り方、強弱、ヴィブラートの周期や深さまで、すべての音のふるまいについて、鋭敏な耳はそのちがいを感知する。調和を願う心が、かえって奏者に疎外感をもたらす。オーケストラ奏者は自分の思い⑧描く理想の音と、他人（ひと）の思い描く理想の音のあいだに⑨ハサまれて、いつもストレスを抱えている。互いが互いに対してちょっと迷惑なのだ。

ところが面白いことに、コンピュータを使い、音程はもとより発音のタイミング、音の立ち上がりなどすべての要素をぴたりと一致させてオーケストラ音楽をシミュレートすると……、これほど味気のない音もあるまいという音楽が聞こえてくるらしい。ずれを⑩ハイジョし、すべてが完璧に一

致する音楽は砂をかむような響きだ、という。

そこで、さまざまな音楽的要素を微妙にずらしてみる。これが、結構それらしく聞こえる、というではないか。本物のオーケストラの音を録音したかのようにさえ聞こえてくる瞬間もあるようだ。

こうした実験の結果から考えられるのは、じつはひとを包み込むような豊かで温かなオーケストラのサウンドは、それぞれの奏者の奏でる音の一致しなさから生まれてくるのではないかということだ。皆が一致することよりも、一致しないところに充実したオーケストラサウンドの魅力は隠されていると想像するほかはない。そう考えると、ますますオーケストラは社会のあるべき姿を映しているようではないか。

もしも成員の全員が一分のすきもなく、与えられた役目に同じことをする社会が実現したとしたら、それはとりもなおさず、あなたがあなたである必要はなく、私が私である必要のない社会を意味しよう。誰もが一つの課題に対し同じことを言い、同じ行動をとるのだから個人の顔の必要性はなくなる。そこにいるのが特定の誰かである必然性はない。誰かの代わりが見つからなくて困る、というようなことは原理的に起こりえない。誰がどのポジションにいようとも、いつでも替えがきくからだ。そんな非人間的な社会で、ひとがいきいきと、各々の役割を果たせるとは思えない。

手触りのやさしい社会は、個々人の価値観が多少ずれていても、正否の基準が人によって違っていても、それを鷹揚に受け入れる共同体ではないか。端的にいうと、いつでも互いに迷惑をかけあえる集団であるはずだ。であればこそ、顔が見える。

だとすると、各奏者の発する音が微妙にずれるオーケストラは、全員が全員に対してずれているという事実ゆえに、一人としてその奏者に代わる者はいないことになる。互いに歩み寄ろうとしても埋めることのできない溝が、かけがえのない顔の象徴でもあったわけだ。

どうやら、ひとびとを魅了してやまないオーケストラの響きは、音楽観が違い、美意識が違い、

正否の基準が違う奏者たちの多様な価値観から生み出されるものであったようだ。個性ある音楽家ならではのずれが一つずつ重なることによって、オーケストラは初めて魅力ある音を奏でることができる。「いったんその席に座ったものは断固として、その人間の責任で音楽を作らねばならない」という言は、じつはオーケストラからの「あなたの代わりになる奏者はどこにもいない」という呼び声ではなかったか。

「ほかでもないあなたを必要としている」という音楽からの招きに応えて、奏者たちは、作品のなかに深くに入り込むことができる。たとえそれが、孤独な作業であったとしても、だ。

（大嶋義実『演奏家が語る音楽の哲学』〈二〇二二年・講談社〉に基づく）

注1　「オケ」……「オーケストラ」の略語。

問一　傍線部③⑤⑥⑨⑩について、カタカナを漢字にあらためよ。

問二　次に示す表現【a】～【e】は、傍線部①②④⑦⑧の文字を使用したものである。【a】～【e】のそれぞれの表現のうち、二重傍線部の漢字の読みをひらがなで書け。

【a】譲渡　【b】皆目　【c】枝葉末節　【d】埋蔵　【e】点描

問三　空欄 1 にあてはまる表現としてもっとも適切なものを次の①～⑤の中から一つ選び、番号で答えよ。

① 親和性　② 多様性　③ 社会性　④ 主体性　⑤ 道徳性

問四　波線部A「オーケストラプレイヤーたちは、実際にはひとり一人が孤独だ」について、「プレイヤーたち」はなぜ「孤独」なのか。その理由について五十字以上、六十字以下（句読点を含む）で説明せよ。その際、以下の条件を守ること。

〔条件1〕　一文で表現すること。
〔条件2〕　「自分が出す音」という表現で書き出すこと（字数に含める）。
〔条件3〕　「求められるから。」という表現で文を終えること（字数に含める）。

問五　波線部B「寄りかかろうとする」について、この箇所での「寄りかかる」と同義の二字の表現を本文中から抜き出せ。

問六　波線部C「砂をかむような」について、その意味としてもっとも適切なものを次の①～④の中から一つ選び、番号で答えよ。

①面白みがなくつまらない様子。
②悔しくてたまらない様子。
③苦々しく歯ぎしりする様子。
④驚き呆れて目をそむける様子。

問七　次に示す①～④の各文について、本文の内容と合致するものには○を、合致しないものには×を記せ。

① 枝や葉に全く同じものがないように奏者それぞれに個性があり、その個性はまとめ役の指揮者でさえも把握ができない。

② オーケストラの奏者は、個性ある音楽家として意図的にずれを生み出そうとしながらも、他の奏者との調和を希求するという、相反する逆説的な欲求を抱える。

③ 他の奏者の音よりも自分の奏でる音の方こそが正しいと自信に溢れている奏者たちの集合体であるオーケストラは、理想的な社会の縮図であるといえる。

④ それぞれの奏者の出す音に微細なずれが生じるのは、奏者一人ひとりが異なる美意識や価値観、基準を持っているからである。

三、次の①～⑤の各文について、カタカナで記された傍線箇所を漢字と送り仮名を用いた表記にあらためよ。その際、送り仮名についてはひらがなで記すこと。

① カシテイタ本を友人から返してもらった。

② 保育所に子どもをムカエに行く。

③ のどがカワイタので、冷蔵庫から麦茶を出して飲んだ。

④ 天からサズカッタ才能。

⑤ アルバムにはナツカシイ思い出がたくさん詰まっている。

（以下余白）